



## 古漢語の詩句に見られる表現形式「作・・・看」の 意味・用法・特徴等について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 『人文学論集』 編集委員会 公開日: 2025-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柴田, 清継 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/0002002753">https://doi.org/10.24729/0002002753</a>

## 古漢語の詩句に見られる表現形式「作…看」の

### 意味・用法・特徴等について

柴田清継

#### はじめに

現代漢語の例えば「我把你当做妹妹一样看待」といった文の「当做…一样看待」に相当する古漢語の表現として、「作…看」がある（「作…一樣看」となる場合もあるが、「一樣」の2字は不可欠なものではない。また、ごく稀に「作」ではなく、「做」が使われる）。その人口に膾炙した例としては、『唐詩選』所載の高適（704-765）の戦国時代の故事を詠んだ《詠史》の後半「不知天下士，猶作布衣看」（唐 2241）〔天下の士なるを知らず、猶ほ布衣と作して看る〕を挙げればいまいだろう。魏の中大夫須賈が、范雎が天下の士たることを見抜けず、ただの一庶民とばかり見なしていたことを言うものである。現代漢語との対応を意識して、「作布衣看」の構文をとらえるなら、「作」は前置詞または動詞、「布衣」は言うまでもなく名詞、「看」は動詞となり、直訳は「布衣と見なす」もしくは「布衣として扱う」といったものになり、訓読は「布衣と作して看る」がふさわしく思われる。

ところが、これまでに世に出た『唐詩選』の和訳書や解説書のたぐいを見てみると、そのほとんどがこの4字を「布衣の看を作す」と訓読している<sup>1</sup>。訳文はおしなべて「一庶民と見なす」といった系統のもので、抵抗がないのだが、訓読文の方には違和感を覚えざるを得ない。「作…看」の表現が含まれている漢詩文で、和訳書や解説書等が出ていて比較的容易にその読みを確認することのできるものとしては、白居易や蘇軾の詩句があり、いずれも約10個の使用例があるが、それらもまた、大半がこれまで「…の看を作す」の形で読まれてきている。

このような訓読が過去からの伝統を受け継ぎ、それに基づいたものであろうことは直ちに想像されるところである。そこで、筆者は江戸から明治・大正期にかけての「作…看」の訓読の仕方を概観すべく、汲古書院から刊行された中国漢詩の和刻本、日本漢詩（江戸期のものが大部分を占め、文も一部含まれるが、大半は詩である）集、それぞれの影印本シリーズ計65冊<sup>2</sup>の全ページをめくり、調べてみた。訓点の施されていないものも一定数あった

<sup>1</sup> 「布衣と作して看る」と訓読しているのは、管見の限りでは、中島敏夫・佐藤保訳『唐詩選下』（学習研究社、1986年）のみ。

<sup>2</sup> 中国詩和刻本の集成としては、①和刻本漢詩集成第1～第10輯（唐詩）。②和刻本漢詩集成第11～第16輯（宋詩）。③和刻本漢詩集成第17～第20輯（補篇）。④和刻本漢詩集成総集編第1～第10輯。日本人の詩文（詩が大半を占める）の集成としては、①詞華集日本漢詩第1～第11巻。②詩集日本漢詩第1～第

古漢語～

が、返り点・送り仮名の双方が施されているものはもちろんのこと、返り点のみのものも、点の位置から判断して、一部の例外を除き、圧倒的多数が「…の看を作す」の形で読まれていることを確認できた。目撃した用例は 300 以上に上る。

人の名や字について紹介する時の「A 名 B, 字 C」という中国語（この場合、古漢語・現代漢語の区別なし）の文の「名」や「字」は動詞であるが、訓読では普通「A 名は B, 字は C」というように、いずれも名詞として読まれる。そのように、中・日両語の文法上の大きな懸隔のため、訓読では日本語としての自然さを優先し、一部の語を中国語としての品詞とは別の品詞に置き換えて読むことがなされる場合があり、「作…看」を「…の看を作す」と読むのも、そのような訓読習慣の一つと言ってしまうと、それまでである。しかし、「A 名 B, 字 C」の場合、日本語では「名」にも「字」にも動詞としての読み方が形成されていない（「名づく」という読みはここに合わない）ため、「名」「字」を動詞として読もうにも、結局それらの名詞性を残したままの「A は B を名とし、C を字とす」という読み方程度しかできないのとは異なり、「作…看」の「看」は、「みる」という動詞としての読みの方が常用されていて、こちらの方がむしろ自然であるのに、なぜそれが使われないのか。その点に、少なくとも筆者は相当な違和感を覚えるのである。

それでは、古漢語の「看」の品詞性はどうか。『漢語大詞典』は「看」の意味を第四声の場合については 13 項に、第一声の場合については 2 項にそれぞれ分け、訳語（現代漢語）を挙げるか、用法を説明するかしており（第 7 巻 p.1180）、いずれも品詞が明記されているわけではないが、名詞と判定できるものは見当たらない。この点、「看」と意味・用法が一部重なるように思われる「觀」と比較してみると、その特色が把握しやすいだろう。「觀」も『漢語大詞典』では読音に応じ、二つに分けて取り上げられているが、「看」と意味の近い第一声の方について見ると、仮借義を除く 11 項のうち、動詞が 7 項で、形容詞が 1 項、名詞が 3 項となっている（第 10 巻 pp.358-359）。

日本語の「看」はどうか。日本語でも、これに「が」「の」「を」等の格助詞を接続させて使うこと、すなわち「看」を名詞として使うことは、ほとんどあり得ない<sup>3</sup>。このような「看」の語感は何百年前の日本人にもあったらと思うのだが、そうであればあるだけに、なぜ「…の看を作す」という訓読が行われたのか。訓読という一種の特殊な言語場における習慣だったと言ってしまうとそれまでだが、ひょっとすると何らかの原因や背景があったかもしれない。この思いが筆者の今回のアプローチの出発点である。

アプローチのステップとして筆者が考えたのは、「作…看」の形が古漢語の中でどのように使われてきたかの調査、そしてそれを踏まえて、この形が中国典籍の和刻本においてどう訓読されているかの再調査、さらに日本人作成の漢詩文においてこの形がどのように運用され、どのように訓読されているかの調査である。このほど、これらのうち、第一段階の「作

20 巻。③紀行日本漢詩第 1～第 4 巻。

<sup>3</sup> 突拍子もない挙例になるかもしれないが、「立て看」・「正看」・「准看」は、いずれも略語である。

古漢語～

…看」の形が古漢語の中でどのように使われてきたかの調査を、詩句のみに限定してではあるが、行ったので、その結果をまとめて記述するのが本稿の内容である。詩句のみに限定した理由は後述する。なお、公刊された諸書に見られる「作…看」を含む詩句の和訳や注釈で疑義のあるものについては、行文中、随時その正解を追求するとともに、一部の詩句については末尾の「附説」で特に取り上げて私見を述べることにする。

ここで、今回用例収集のために利用した資料を示し、筆者が行った用例収集の仕方について説明しておこう。

【目撃した資料】※A～Hの記号は、後の説明の便宜上付けたもの。

『全唐詩』全25冊、中華書局、1960年。A／（清）李調元編、何光清点校『全五代詩』上・下冊、巴蜀書社、1992年。B／北京大学古文献研究所編『全宋詩』全72冊、北京大学出版社、1991～1998年。C／閻鳳梧・康金声主編『全遼金詩』上・中・下冊、山西古籍出版社、1999年。D／楊鐮主編『全元詩』全68冊、中華書局、2013年。E／全明詩編纂委員会編『全明詩』第1-3冊、上海古籍出版社、1990-1993年。F／（清）朱彝尊編『明詩綜』上・下冊、世界書局、1962年。G／徐世昌輯『晚晴簃詩匯』2冊、上海三聯書店、1989年。H

唐から元までは断代の総集があるので、完璧に近い用例収集が可能である。ところが、明は、これも一代を通じての総集制作が目指されたものの、今のところ第3巻までしか刊行されておらず、清はそのような総集制作の計画すら耳にしない。そこで、明についてはFのみならずGも加え、清については最も多くの作品が収載されていると言われるHを利用することにする。ただ、完璧に近い収集が行われているA～Eに比べれば、G・Hの収載量は格段に見劣りがするので、せめてもの補いとして、筆者がすでにその全体に目を通した上述の汲古書院刊行の中国漢詩集和刻本収載の作品も必要に応じ利用することにした。

用例収集の仕方は下記のとおりである。

「作…看」及びこれと関連する形の表現は、韻文・散文の別を問わず見出されること言うまでもないが、本稿では、検討の対象は詩句のみとする。それは用例検出作業の便宜によるものである。上記の資料源のうち、A・G・Hには電子化資料があるので、たちどころに遺漏のない検索ができるのだが、その他のB・C・D・E・Fは、一枚ずつすべてのページをめぐって目視確認していくことしかできない。紙の資料を目視確認する場合、散文だと作品の全体に目を通す必要があるが、「作○看」や「作○○看」という形を含む詩句となると、たいてい「看」を末字として句の下部に位置し、しかも「看」が韻字となる場合がかなり多い。そこで、それぞれの作品の末尾の字を見て、それが「看」字であれば、もちろん直ちに拾い、「看」が属する寒韻の他の字であれば、作品のそれより前に「看」字で終わる句がある可能性があるから、前に戻って所在の有無を確かめる。このような方法で、存在する大半の用例を見つけ出すことができるのである。しかし、もちろん、これは完璧なやり方ではない。「看」字で終わっていても押韻しない句や、長編の作品で、途中で換韻している場合は見落とす可能性がある。したがって、筆者の検出は完璧なものではないが、それでも全体として700個ほどの用例を見つけ出したので、それらをもとに考察をした内容は発表する価値に乏しい

古漢語～

ものではないと信じる。

次に、本文中で引用する資料の出処の標示の仕方について説明しよう。A・B・D・Hはいずれも全冊通しページになっているので、それぞれ「唐」・「五」・「遼金」・「清」に続けてページ番号という示し方（「晚晴簃詩匯」を「清」と略する点に注意）。E・Fは1冊ごとのページ番号になっているので、「元」もしくは「明」の後にそれぞれ何冊目かを○囲みの数字で示し、その後にページ番号を続ける（例：『全元詩』第1冊のp.23なら元①23）。Gからの引用は本稿ではしない。汲古書院刊行の中国漢詩集所載の作品を引用する場合は、その詩集名を示し、所収書を注記する。

作者の生卒年の標示については下記の通り。B～Fの資料には作者の生平に関する説明があり、生卒年が明記されていれば、それに従って示す。A・G・Hも含め、資料中に生卒年が明記されていない作者については、インターネット等で調べて何らかの記載が見つければ、それにそのまま従って示したが、すべてが定説とは限らない。大体の時期を知るための一助としていただければ幸いである。生卒年不明の場合は、当然のことながら、標示しない。ただ、A～Gの資料は基本的に時系列の作者配列という方針が採られているので、所載冊・ページの順が時期把握の一応の目安になると思われる。

文中、地の文は「龍」「萬」等一部の字を除き、常用漢字を使う。作品名と引用文は極力、依拠した資料の字体と一致するものか、これに近づけたものを使うことにするが、ワープロ機能上の制約があるので、完璧を期することはしない。書名は『』で括るが、作品名は《》で括る。筆者の構文把握を示すのに役立つ面があるので、引用詩句にはすべて訓読文を〔〕に入れて添えることにする。

## 1 「作…看」についての先行言及

「作…看」については、残念ながら、先行研究と言えるほどのものは見当たらないが、「先行言及」ならある。張相（1877-1945）の『詩詞曲語辭匯釋』<sup>4</sup>における「疏釈」は、この研究の出発点となるものである。彼は「看(-)」の条で、「看，估量之辭」とし、「作…看」の形を取る白居易の詩句（1例）・蘇軾の詩句（2例）・王安石の詩句（1例）を例に挙げて、「作某某看，即當做某某看待也，亦估量辭」と述べている（pp.311-312）。

管見の限り、「作…看」について最も長文の言及をしているのは、実は我が国江戸時代の鈴木玄淳（1703-1784）で、その著『詩語考附録』<sup>5</sup>にその説が見られる。彼は「凡ソ吾邦ノ人、常ニ和訓ヲ以テ、文字ヲ通用スルニヨリ、詩文ノ語誤ル者鮮カラス」として、まず「視聽見聞ノ四字」にそれぞれ「差別」があることを説き、次に「爲作ノ二字、混ジ用ユベカラザル者アリ」として、主に「作…看」と「爲…看」の違いについて論じている。彼はまず「作

<sup>4</sup> 張相『詩詞曲語辭匯釋』、中華書局香港分局、1962年。

<sup>5</sup> 池田四郎次郎編『日本詩話叢書』巻1（文会堂書店、1920年）所収。

古漢語～

…看」の形になっている24の例<sup>6</sup>を挙げ、「右唐ヨリ宋明迄、遍ク抄シ出セ凡、都テ作看ノ二字ヲ拆キ用テ、爲看ノ二字ヲ拆キタルヲ見ズ」と述べ、我が国の荻生徂徠（1666-1728）・龍草廬（1714-1792）・大江玄圃（1710-1749）・南宮大湫（1728-1778）の詩句に使われている「爲看ノ二字イブカシ」とする。そして明詩には「世路還同燕石看」という「同…看」の形が見えるが、「爲…看」の形に関する限りは、少なくとも「唐ニハ固ク、ナラヌ響アリト見」えるのに、「徂徠ナドサヘ其沙汰ナケレバ」、日本の人たちはこの点について自覚できていないと断じている。ここで言う「唐」は通時的な、日本に対する中国という意味ではなく、文字通りの唐代の意味で、唐詩を模範とした徂徠自身が意外にも唐詩のディテールについて見通していなかったという点を衝いた発言であろう。

この後、玄淳の所説の大筋は「予私ニ思フニ、作看ト云フハ華人平生ノ言語ニテ、人々口ナレ耳ナレテ、爲看ト云語ハ耳遠ユテ通ゼザル者ナラシ<sup>7</sup>、サレバ作看ノ二字ハ、久キ成語也ト見エテ」<sup>8</sup>云々という形で一応収束するが、この後、我が国の大沢猶興と大江玄圃の詩に見られる「成…看」の形も取り上げ、「実ニ和人ノ詩也」として貶めている。

また、玄淳は「作…看」について、「…ト作シ看ル」と「…ノ看ヲ作ス」の二通りの読み方があり、前者は「諸の註疏等」で使われるものであるのに対し、後者は詩句に使われるもので、「詩ハ誦シテ其声ノ穩ヤカナルガ爲ナルベシ」としているが、こうした二通りの読み方の語感の違いは、今のところ筆者にはよくわからない。ただ、少なくとも、彼にとってこの二通りの読み方はあくまで読む対象の性質の違いに応じて区別しただけのもので、読み取った意味上の区別はなかったのである。

ところで、彼は「爲…看」「成…看」「同…看」の使用をいわば和習として戒めたわけだが、実はこれらの表現は中国の詩句にも一定数見出せる。ただ、彼の指摘をありがたく受け止め、この後、「作…看」との共通点・相違点が浮き彫りになることを期待し、併せて考察の対象としたいと思う。

なお、彼は『詩語考附録』の末尾で、「成作爲三字、事ニヨリ通ズレドモ、作為ハイヅレモ造作ノ心ナリ。始ニモトヅキテ云。成ハ、成就ノ心。終ヲ要メ云フ也。是又心得フベキコトナリ」と述べており、この3字の差異についての議論が積大典（1719-1801）の『詩語解』（宝暦13年＝1763刊）へ（巻之下29丁）、さらに同じく積大典の『文語解』（明和9年＝1772自序）へ（巻之二5丁、巻之三40丁）へ、さらにはこれまた積大典の『詩家推敲』（寛政10年＝1798自序）へと続き、その後、津阪孝綽（1758-1825）の『夜航詩話』（天保7年＝1836）巻之二でも見解が示されているが、これらの議論は「作…看」の考察にとっては見

<sup>6</sup> 24番目の例は「幾就扶疎月影看」だが、すぐ下に「就與作做同」と書き添えられている。なお、24例中には上引の高適の句も含まれている。

<sup>7</sup> この「シ」は「ン」の誤りだろうと思われる。

<sup>8</sup> 作者が「作」に「サ」という読み仮名を付けているのは、彼が「作…看」の形を取る「作」を、出現が遅く白話で多く使われてきた「做」と同一視していることのためではないかと思われる。したがって、「作看ノ二字ハ、久キ成語也」と言っても、それは「作…看」の形が用いられてきたことに一定程度の歴史がある（作者の挙例は唐代のもの以後）という意味に過ぎず、故事成語の多くに見られるような、より古い来歴があるという意味ではないだろう。

古漢語～

当違いな面があるので、ここでこれ以上は扱わない。<sup>9</sup>

## 2 唐代

### (1) 高適・張鼎の作品

「作…看」の形は唐代より前の作品には見かけない。『全唐詩』の中では先述の高適の作品に最も早くこの形が現れるが、彼にはもう一つ、「仍憐門下客，不作布衣看」（唐 2231）〔仍ほ憐れむ門下の客の、布衣と作して看ざるを〕という句もある（《同羣公十月朝宴李太守宅》の尾聯）。

では、ともあれ、この形が見られる最古の作品は高適の詩句かと言えば、直ちにそのように判断するわけにはいかない。補遺に属する『全唐詩』巻 882 所載の張鼎《山中松》の後半に「幾經良匠顧，猶作散材看」（唐 9972）〔幾たびか良匠の顧み、猶ほ散材と作して看るを経たらん〕とある。張鼎については詳細は不明だが、儲光羲（約 706 約-770）に《同張侍御鼎和京兆蕭兵曹華歲晚南園》と題する詩（唐 1415）があり、この張侍御鼎が張鼎その人だとすると、高適とほぼ同時代の人ということになる。したがって、詩の中で「作…看」の形を最も早く使った人としては、高適と張鼎がその候補者と言うべきかもしれない。

### (2) 白居易の作品

次は『全唐詩』中「作…看」の用例が突出して最も多い白居易（772-846）の作品である。彼の「作…看」の用法については、筆者は既に私見を発表したことがある<sup>10</sup>が、その後、彼以外の多くの用例に接し、多くの参考文献に目を通したことにより多少広がった視野と、深まった理解に基づき、再説を試みたい。—「…として見る」「…と見る（見なす）」という解釈だけで通じるのは、《與諸客空腹飲》の「莫作老人看」（唐 4956）〔老人と作して看る莫かれ〕、《酬周協律》の「猶作近臣看」（唐 5005）〔猶ほ近臣と作して看る〕、《玩迎春花贈楊郎中》の「莫作蔓菁花眼看」（唐 5048）〔蔓菁花眼と作して看る莫かれ〕の 3 例である。

《留北客》の「莫作帝郷看」（唐 4919）と《酬楊八》の「勞作雲心鶴眼看」（唐 5011）、《酬別周從事二首》其一の「莫作陶潛范蠡看」（唐 5033）、《奉酬侍中夏中雨後遊城南莊見示八韻》の「人作謝公看」（唐 5153）、これらの句の「作」については、『漢語大詞典』のこの字の釈義の⑩「似；如」（第 1 巻 p.1246）が当てはまると見たい。それぞれ次のように訓読すればいいだろう。—「帝郷の<sup>と</sup>作く看る莫かれ」、「雲心鶴眼の作く看るを勞せんや」、「陶潛范蠡の作く看る莫かれ」、「人謝公の作く看る」。詩句によっては、「…と見る（見なす）」、「…の

<sup>9</sup> なお、参考までに、「先行言及」としては、フランスのシナ学者スタニスラス・ジュリアン（1799-1873）に「(1)「作…看」は文法用語で、…という意味なり、の意。(2)「当…看」は文法用語で、…にあたる、…にひとしい、の意」(J:Syntaxe I, p. 286) という旨の指摘があるという（中村元『広説仏教語大辞典』（東京書籍）p. 226）が、未見。

<sup>10</sup> 『武庫川女子大学言語文化研究所年報』第 33 号（2023 年）所収の拙稿「漢文読解ノート—『白氏文集』読解作業の中間報告として」三、「作…看」の用法」。

古漢語～

ように見る（見なす）」のいずれで解釈しても通じるものもあるが、後者の訳語を念頭に置いて検討することにより、「作…看」解釈の不自由さはある程度緩和される。

《戲贈戸部李巡官》の「莫作忠州刺史看」（唐 4912）〔忠州刺史と作して見る莫かれ〕は、作品の文脈からすれば、「私を忠州刺史で終わる人間と見なさないでくれ」といった意味であり、このように「作…看」は、往々にして訓読だけでは十分に表せない、含蓄のある表現として使われることがある。この句が、本稿に登場するようなタイプの第一号である。

《重贈李大夫》の「猶作銀臺舊眼看」（唐 4912）について、筆者は前稿（注 10 所掲）で、徐仁甫の説を含む二通りの解釈を示したが、その後、「作…眼」の用例をいくつか見つけたことにより、徐仁甫（1901-1988）が『广释词』<sup>11</sup>で提起している、「作」に「用」の意味ありとの説の方に与し、「…の眼を 作<sup>もち</sup>みる」「…の眼を 作<sup>もつ</sup>て」という読み方を適用して解釈したい。徐仁甫の説に与する立脚点を固めることになった用例を列挙してみよう。蘇軾（1037-1101）《和蔣夔寄茶》「故人猶作舊眼看，謂我好尚如當年」（宋 9219）〔故人猶ほ舊眼を作て看、謂ふ我が好尚は當年の如しと〕。／畢仲游《蒙晃美叔秘監召觀書帖繼示長句次韵》「元匪白眉者，謬作青眼看」（宋 11895）〔元白眉の者に匪ざるに、謬りて青眼を作て看る〕。私などもともと優れた人間ではないのに、青眼で見てもらっているの意である。／周行己《知趙鼎臣贈呂令二首》其一「要知四海皆兄弟，莫作前人青白看」（宋 14376）〔四海皆兄弟なるを知るを要す、前人の青白<sup>12</sup>を作て看る莫かれ〕。／韓駒（1080-1135）《次韻胡元茂館中直宿》「我老百念冷，飢餐困來眠。寄聲同學兒，莫作舊眼看」（宋 16597）〔我老いて百念冷め、飢うれば餐<sup>く</sup>ひ 困<sup>ねぶた</sup>くなり來れば眠る。聲を同學兒に寄せん、舊眼を作て看る莫かれ〕。／劉才邵（1086-1157）《過唐興寺》「荷公高誼存真趣，不作尋常俗眼看」（宋 18863）〔宋荷公の高誼は真趣存す、尋常の俗眼を作て看ず〕。／徐僑（1160-1237）《西湖》「最惜傍欄鳧鷖狎，往來不作眼生看」（宋 32822）〔最も惜しむ欄に傍ひて鳧鷖狎れ、往來眼を作て生看せざりしを〕。／白玉蟾（1194-?）《贈紫巖潘庭堅四首》其一「歲晏乃得子，勞作青眼看」（宋 37502）（歲晏くして乃ち子を得たり、青眼を作て看るを勞（慰勞の意）す）。潘庭堅、号紫巖に、年を取ってから子供ができたのを祝って贈った詩である。「眼」ではなく「目」が使われている次の例も、同列のものとしていいだろう。蘇轍《送家安國赴成都教授三絶》其二「論兵頓似前賢語，莫作當年故目看」（宋 10034）〔兵を論ぜば頓に前賢の語に似たり、當年の故目を作て看る莫かれ〕。「故目」≡「舊眼」と見なしていいだろう。以上とやや性質の異なるものとして、李新（1062-?）《送菜徐秀才》（六言絶句）其一の結句がある。作品の全体を挙げると、「吏部齏鹽滿腹，先生苜蓿盈盤。珍重尋常癡客，不作膏粱眼看」（宋 14221）〔吏部の齏鹽は腹に滿ち、先生の苜蓿は盤に盈つ。尋常の癡客に珍重す、膏粱と作して眼看せざれ〕。「膏粱の眼と作して看ざれ」という読みでは意味を成しにくいことと、句中の2字ずつのリズムから見て、「眼看」でひとまとまりと見るべきで、意味としては『漢語大詞典』におけ

<sup>11</sup> 徐仁甫編著、冉友僑校訂『广释词』（四川人民出版社、1981年）pp.391-392。

<sup>12</sup> ここの「青白」には『漢語大詞典』のこの語の条の「指青眼和白眼」（第11巻 p.520）との釈義が当てはまる。

古漢語～

るこの語の積義の㊦㊧「眼見；目睹」（第1巻 p.1215）、特に後者が当てはまるだろう。ただ、これは「作…看」の変則的な形とも言え、六言の詩形を使ったために生まれたものと見られる。

白居易の句に戻ると、「(君だけは) こうして尾羽うち枯らしている私を馬鹿にしないで、今もなおかつての翰林院の高官として昔と変わらぬ目をもって接してくれる」という解釈でいいだろう。「作銀臺」の部分は、上述の含蓄のある表現であり、言葉を補って解釈する必要がある。

以上のような後続の使用例が存在することにより、白居易の「作…眼」も「…の目（視点）をもって」という意味にとることのできる場合のあることは、確実なものになったと言えるだろう。白居易にはもう一つ、「試作循潮封眼想，何由得見洛陽春」（唐 5243）という詩句（《六年立春日人日作》）もあり、これも〈試しに（旧友たちが左遷された）循州・潮州・封州などからの視点で考えるなら、どうすれば洛陽の春を目の当たりにすることができるだろうか（という心境になるのだろうか）〉といった意味に解釈することができるだろう。訓読は「試みに循潮封の眼を作て想はば、何に由りてか洛陽の春を見るを得ん」となる<sup>13</sup>。

なお、白居易には鈴木玄淳が問題視した「爲…看」と見かけ上同一の表現も2例見られるので、ここで言及しておきたい。この形を含む詩句の一つは《寄李相公》の「唯求造化力，試爲駐春看」（唐 5158）、もう一つは《韋七自太子賓客再除秘書監以長句賀而餞之》の「老監姓名應在壁，相思試爲拂塵看」（唐 5162）である。ただ、いずれも平仄から考えれば、直ちに解釈の道は開かれる。前者において「爲」を含む句の四番目の「春」は平声であり、一方、後者において「爲」を含む句の二番目の「思」と六番目の「塵」は平声であるから、近体詩の詩律に準ずれば、どちらの「爲」も仄声でなければならない。であれば、「…ために」という意味の前置詞と見るのが順当ということになる。訓読すれば、それぞれ「唯だ造化の力を求め、試みに爲に春を駐めて看ん」、「老監の姓名應に壁に在るべし、相思はば試みに爲に塵を拂ひて看よ」となる。いずれも「爲」の目的語が省略されており、補うなら、前者では〈私〉、後者では〈私〉もしくは〈あなた〉だろう。

このように、「爲…看」の形を取ってはいるものの、「…と見なす」という意味とは別物の表現ということになる。また、「看…」のみについても、前者では英語の try to...のような意味に受け取れ、『漢語大詞典』のこの字の条の㊦「用在动词或动词结构后面，表示先试试之意」との積義（第7巻 p.1180）が当てはまるし、後者では「見る」の意味も含みつつも、こ

<sup>13</sup> 我が国で現在流布している可能性のある岡村繁『白氏文集』第12冊上（明治書院新釈漢文大系、2010年）pp.520-521は、語釈で「眼想」を「眼前に見るように思いうかべる」意とし、上句を「試みに循・潮・封の眼想を作すに」と訓読し、「試みに循州・潮州・封州など僻遠の地に左遷された旧友たちの身になって想いを馳せてみると」と訳している。結果として訳文は誤りとは言えないが、訓読はこの句の構文を誤認したものと言わざるを得ない。なお、連接する「眼看」の2字を含む白居易等の詩句の解釈については、我が国の積六如（1734-1801）の『葛原詩話』（1787年序）・『葛原詩話後編』（1804年刊）、津坂孝緯の『葛原詩話糾謬』（1812年刊）に議論があり、この議論を通じて出現した「眼」の独自の用法に基づいて作られた我が国の漢詩も存在するが、今後また別の機会に取り上げて紹介することにしたい。

古漢語～

れも try to...のような意味にもとれる<sup>14</sup>。現在我が国で『白氏文集』全体の訓訳書として唯一の新釈漢文大系『白氏文集』は、上引《寄李相公》の下句の「試爲…看」を語釈で「試に…してみる」意と説き、句全体を「試爲<sup>こころみ</sup>に春を駐めて看んのみ」と訓読し、一方、《韋七自太子賓客再除秘書監以長句賀而餞之》の下句の「試爲…看」については語釈で「…してご覧なさい」の意とし、句全体を「拂塵を爲して看よ」と訓読している。「看」の解釈は誤っていないが、「爲」の意味を誤認し、しかも両詩に共通する「試爲…看」の解釈に整合性を欠いている<sup>15</sup>。

### (3) 白居易より後の作者の作品

『全唐詩』の白居易より後の作品には「作…看」の形が、上引の張鼎の作以外に、6例見られるが、そのうちの2例について特に言及しておきたい。

まず、李建勳(?-952)の《醉中詠梅花》は南方勤務となった作者が季節外れに咲いた梅花を見て悲しむ作品であり、その頸聯「還悲獨詠東園裏，老作南州刺史看」(唐 8432)は「還た悲しむ獨り東園の裏に詠じ、老いて南州の刺史と作りて看るを」と読むのがふさわしいと思う。つまり、誰かを南州の刺史と見なすというのではなく、自分が異郷の南州の刺史となり、その梅花を眺めるということであって、「作」は「…となる」、「看」は「(何物かに実際に視線を向けて)見る」の意味で使われている。

もう一つは、章孝標(791-873)が小さな松の木について詠んだ《小松》の後半「莫言只是人長短，須作浮雲向上看」(唐 5758)「言ふ莫かれ只だ是れ人の長短(人の背丈程度の意)のみと、須らく浮雲上に向かふと作して看るべし」で、下句の和訳は、直訳では物足りず、「空に浮かんだ雲が上昇していく、そんなイメージでとらえるべきだ」といったように、言葉の肉付けをして訳す必要が起こってくる。白居易の項で「訓読だけでは十分に表せない、含蓄のある表現」という指摘をしたが、この句もそのようなタイプの一つと見ていいと思われる。もちろん、「作」を「ごとく」と解してもいいのではあるが、…。

他の4例は特に注意を要するほどのものではないが、張渾《七老會詩》「斯筵堪作畫圖看」(唐 5265)「斯の筵畫圖と作して看るに堪へたり」の「作畫圖看」は、筆者が今回の用例収集で、清代のものに至るまで何度も見かけた常套表現の一つである。

次に、鈴木玄淳が唐風ではないとした「爲…看」の用例として、いずれも唐も最末期の人たちではあるが、貫休(832-912)《硯瓦》の「無爲瓦礫看」(唐 9347)「瓦礫と爲して看る無かれ」と黄滔(840-911)《花》の「東風吹綻還吹落，明日誰爲今日看」(唐 8131)「東風吹きて綻ばせ還た吹きて落とす、明日誰か今日の爲<sup>ごと</sup>く看ん」を挙げることができる<sup>16</sup>。後者の

<sup>14</sup> 志村良治『中国中世語法史研究』(三冬社、1984年)では、「試爲駐春看」が「試みに～して見てみる」の表現として取り上げられている(p.61)。

<sup>15</sup> 岡村繁『白氏文集』第11冊(明治書院新釈漢文大系、2015年)p.326、pp.352-353。なお、筆者は先に、同書の問題点を取り上げ修正案を書き連ねた《白氏文集訳解ノート—新釈漢文大系『白氏文集』第十冊・第十一冊を対象として》を『武庫川国文』第96号(2024年)に発表したが、これらの句を見逃した。

<sup>16</sup> この2例は、玄淳の所説を承けた上述の六如や東陽の所説の中で、その存在が言及されている。なお、貫休には《鄂渚逢楊贊禹》の「知音不可見，始爲一吟看」(唐 9361)「知音は見ゆ可からず、始めて爲に一

古漢語～

「爲」は文脈に合うよう読んでおいた。

以上の所説に基づき唐代を俯瞰してみると、次のようなことが言えるだろう。—「作…看」の形は、唐の高適や張鼎の詩句に、「何々を…と見なす」という原初的な意味での使用が初めてわずかながら見られ、その後、白居易に至って一定数の使用が見られる。白居易はこの形を原初的な意味だけではなく、「…のように見なす」とか、さらにもっと含蓄を持たせた意味でも使うようになっている。また、見かけ上この形になっていても、「…の目（視点）で見る」という意味の「作…眼看」の形もあるので、注意を要する。白居易より後には、「作…看」の形を使った詩句が散見し、また、この形と同様の意味を表す「爲…看」の使用も確認できる。

ところで、『全五代詩』から筆者が検出した用例は1例を除き、他はすべて『全唐詩』にも見えるものである。独自の1例も「塵中誰爲擧頭看」（五 1753）〔塵中誰か爲に頭を擧げて看ん〕（林寛《終南山》）というもので、本稿の考察の対象とは別個の形だけの一致である。

「作…看」の意味・用法については、白居易の作品にその基本的なものが出現し、以後はこれに多少のバリエーションが加わり、用法が多少拡大していくといった推移が確認できる程度、というのが筆者の基本的な観点である。そこで、この後は「宋代～清代」と大きく括って、注意すべき詩句を取り上げ、紹介していくという形で進めるが、その中で、「作」・「看」それぞれの用法のディテール、我が国の「…の看を作す」という訓読の妥当性検証に關係する「看」の語性等、叙述の流れに沿って逐次取り上げ検討していくことにする。

### 3 宋代～清代

以下、便宜上、「何々を…と見なす」とか「…のように見なす」とかいう意味を表す「作…看」を「ユージュアル」(usual)、それ以外のものを「アンユージュアル」(unusual)と称することにする。

#### (1) アンユージュアルな用例

まず、細かい指摘にはなるが、外見は「作…看」でありながら明らかに語性上の差異がある用例を指摘しておこう。①禅語「作麼」「作麼生」が使われている句。李綱（1083-1140）《志宏見和西軒詩再賦前韻》の「爲言欲作麼生看」（宋 17568）〔爲に言はん作麼生か看んと欲する〕、釈慧空（1096-1158）《和秀峰》の「教意拈來作麼看」（宋 20641）〔教意拈み來らば作麼か看る〕、趙蕃（1143-1229）《晏齋余自名也～》（題が長文に過ぎるので下略する）の「若人問我名齋義，兩語從渠作麼看」（宋 30824）〔若し人我に齋に名づくる義を問はんも、兩語作麼看んとも從渠〕がその例<sup>17</sup>。②「注意する」の意味の「作意」（『漢語大詞典』第1巻 p.1257）が使われている楼鑰（1137-1213）《羣從泛湖次叔韶韻》の「莫惜終宵作意看」

たび吟じて看ん〕という句もあるが、この「爲…看」は見かけだけの一致である。

<sup>17</sup> これらの禅語の意味については古賀英彦編『禅語辞典』（思文閣出版、1991年）pp.263-264。

(宋 29430) [終宵意を<sup>そそ</sup>作<sup>そそ</sup>ぎて見るを惜しむ莫かれ]。㊦2字の名詞「作者」が使われている潘閻(?-1009)《上李學士》(宋 623)の「試把平生業，來投作者看」[試みに平生の業をば、來り作者に投じて看しめよ]。

㊥ ㊦に挙げた例の「看」もここに属するが、「看」が何らかの具体物に目を向けて見るという実質の意味で使われているものもある。張耒《慈湖中流遇大風舟危甚食時風止遊靈巖寺》の「從今要見廬山面，畫作屏風靜處看」<sup>18</sup>(宋 13263) [今より廬山の面を見んと<sup>おも</sup>要はば、畫きて屏風と作して静かなる處にて看ん] や、呂本中(1084-1145)《寄題暨尚卿雙蓮亭》の「請君更畫作圖看，無使惡木譏雕殘」(宋 18161) [君に請ふ更に畫きて圖と作して看しめ、惡木をして雕殘を譏らしむる無かれ] などが例として挙げられるが、この「畫作」のように「作」が他の動詞に後接して「…作」という複合動詞的なものとなっている場合もまま見られる。その他、党懷英(1134-1211)《黃彌守畫吳江新霽圖》の「不應尚作披圖看」(遼金 733) [應に尚ほ圖を披きて見るを作すべからず]、高翥(1170-1241)《菊花》の「詩人但作菊花看」(宋 34144) [詩翁は但だ菊花を看ることをのみ作す]、方岳(1199-1262)《除夜》の「梅花併作百年看」(宋 38363) [梅花は併せて百年と作して看ん] なども例として挙げられる。

㊦「作」が「…をなす」や「…となる」という純粹な動詞としての意味を持つもの。前者の場合、後接する「～看」がその目的語となる。その例の一つ目は、袁桷(1266-1327)《齋前海棠秋日着數花瓘首賦詩次韻》其二の「政此凄清端慰藉，停盃擬作百回看」(元㊦258) [政に此の凄清端<sup>ま</sup>に慰藉するにあたり、盃を停め百回看るを作さんと擬<sup>ほつ</sup>す]。ちなみにこの詩は其一にも「西帝已能回藻景，爲言莫作杏花看」[西帝已に能く藻景を回らせたり、爲に言はん杏花と作して看る莫かれと]として「作…看」が見られるが、これはユーヅアルな用法である。二つ目は趙秉文(1159-1232)の七絶《題王摩詰畫明皇劍閣圖》の末句。第七句までを挙げると、「劍閣森危隔錦官，雲間棧路細盤盤。天回日馭長安遠，雨滴鈴聲蜀道難。當日六軍同駐馬，他時萬里獨回鑾。傷心凝碧池頭句」[劍閣は森危にして錦官と隔たり、雲間の棧路細くして盤盤たり。天<sup>めぐ</sup>回り日馭するも長安は遠く、雨滴鈴聲蜀道は難し。當日六軍同に馬を駐め、他時萬里獨り鑾を回らす。傷心す凝碧池頭の句]。この後に「有底工夫作畫看」(遼金 1376)と続く。『漢語大詞典』の「工夫」の条に見える釈義のうち、ここに当てはまる可能性のあるのは、①「作事所費的精力和时间」・②「指化費时间和精力后所获得的某方面的造诣本領」・④「时间；时光」(第2卷 p.952)である。②の意味を当てはめ、「(王維は)底<sup>なん</sup>の工夫有りてか畫を作りて看しむる」と読むことも可能だが、第七句とのつながりを緊密にとらえるなら、①の意味を当てはめ、「(私=詩の作者は)底<sup>なん</sup>の工夫有りてか畫を看るを作さん」と読むのがより適当なように思われる。李德壘編著『历代題画詩類編』にも「末句有不忍去看明皇西幸图之意」という同様の解釈が見られる<sup>19</sup>。なお、この「看」は何

<sup>18</sup> たまたま張健『中國古典詩新論』(五南圖書出版公司、1996年) p.277に、この2句の現代漢語訳を見つけたので、紹介しておこう。—「再要觀賞名山勝景或大川疾流，只索畫作屏風，放在安靜而無風浪處慢慢品賞」。

<sup>19</sup> 李德壘編著『历代題画詩類編』下冊(山東教育出版社、1987年) p.840。

古漢語～

らかの具体物に目を向けて見るという実質的意味で使われている。

後者の「…となる」という意味を持つものの例としては、陳師道（1053-1102）《席上勸客酒》の「珠簾十里城南道，肯作當年小杜看」（宋 12712）〔珠簾十里城南の道、肯へて當年の小杜と作りて看ん〕を挙げることができる。この場合、「看」も上掲の『漢語大詞典』のこの字の積義⑬が当てはまる。下句は「往年の小杜のようになってみたいものだね」とでも訳せばいいだろう。

⊙「作」が使役の動詞として使われているもの。張問陶（1764-1814）《高碑店垂絲古柳》其二の「作」の字は、『漢語大詞典』のこの字の積義の⑭「委派；役使。……引申為使得，使」（第1巻 p.1246）の用法が当てはまると見られる。作品はやや難解なので、問題の句を含む前半四句を挙げよう。「平原繫馬五更寒，萬里重來蜀道難。彈汗敢期新夢好，攀條常作故人看」（『船山詩草』卷3の15丁<sup>20</sup>）〔平原馬を繫げば五更寒し、萬里重ねて來る蜀道のごと難し。彈汗敢へて期せん新夢の<sup>よ</sup>好く、條に攀ちて常に故人をして看しめんことを〕。幸い、高学良の『通信典故』にこの詩の大意が次のように説明されている。—「來到平原把馬系在柳樹下，正是五更天最冷的时候，从万里之外重来，如同上蜀道那样难啊！盼望作古柳下有柳神彈柳汁染我而状元及第的好梦，攀那柳条常给老朋友看」<sup>21</sup>。柳の下に柳神がいて、柳の木を刻んで出た汁で自分を染めてくれ、そのおかげで状元及第するという観念は、唐の馮贄の作として伝わる『雲仙雜記』卷1に録される『三峰集』の「柳神九烈君」の故事に由来する<sup>22</sup>。

## (2) ユージュアルな用例

①常套表現 ユージュアルな「作…看」の中には、他の語と組み合わせさせて常套表現となっているものがある。その例を挙げよう。

「作…一様看」。周紫芝（1082-?）《送關康子將還青陽治舊田》の「關郎人物妙人間，莫作雲長一様看」（宋 17268）〔關郎は人物人間に妙なり、雲長と一様と作して看る莫かれ〕をはじめ多数見られる。別バージョンとして「作…一等看」の形もある。例えば韋驥（1033-1105）《九月十八夜宿萊州海廟夜分登亭望月觀海呈伯温舍人》（宋 8504）の「莫作塵遊一等看」〔塵遊と一等と作して看る莫かれ〕。「作尋常…看」。例えば同じく韋驥《和公餘言懷》の「也作尋常潤色看」（宋 8442）〔また尋常の潤色と作して看る〕。

「作等閑（閑）看」。筆者が確認した中で最も早い用例は、宋太宗（939-997）《佛牙讚》の「正心莫作等閑看」（宋 448）〔正心等閑と作して看る莫かれ〕。「作等閑看」は、段成己（1196-1254）の《紅梅》其二に「春意祇<sup>23</sup>應容易見，人情還作等閑看」（遼金 2786）〔春意は祇だ應に容易に見るべきに、人情は還ほ等閑に看るを作す〕という対句があるので、「等閑に看る

<sup>20</sup> 長澤規矩也編『和刻本漢詩集成』第20輯（汲古書院、1977年）p.450。

<sup>21</sup> 高学良『通信典故』（人民郵電出版社、1996年）p.176。

<sup>22</sup> 辛夷・成志偉主編『中国典故大辞典』（北京燕山出版社、1991年）p.406「柳汁染衣（染柳）」の条。

<sup>23</sup> 元②329-330では段成己の生卒年は1199-1279とされ、「祇」は「祇」に作る。

古漢語～

を作す」と読むべきなのかもしれないが、『漢語大詞典』に「等閑視之」が「当平常事情看待」と説かれている（第8巻 p.1141）のに鑑み、「等閑と作して看る」と読んでおくことにする<sup>24</sup>。「莫作等閑看」は、周知のとおり、現在の我が国のお御籤にも記されている五言絶句の結句だが、籤詩としての淵源は南宋時代に刊行された中国最古のお御籤『天竺靈籤』だと言われており<sup>25</sup>、それより古い宋太宗のこの句は、籤詩句の由来を考える際の一つの資料となるだろう。また、この句は、その後、俚諺の一部としても広く使われるようになったようで、『西遊記』のような白話小説にも、「正叫做“若將容易得，便作等閑看”」といった形で使われている（第22回）。

その他、文彦博（1006-1097）《偶題看山樓新畫山水》の「遠觀猶未足，更作畫圖看」（宋 3497）〔遠くより觀れば猶ほ未だ足らざるも、更に畫圖の作く看ゆ〕をはじめとして、「作畫圖看」の形もしばしば見られる。そして、この形は一般に景色等が絵のように見えることを言う表現なので、「看」を「みゆ」と読んでおくが、この点については次項で述べることにする。

㊤自動詞としての「看」 『漢語大詞典』の「看」の条を見てみると、第四声の場合の㊤と㊦を除く㊠から㊩までの積義と、第一声の場合のすべて（㊠と㊡）の積義は、みな純粋な動詞としての扱いであり、しかもみな他動詞である。他動詞であることは、自他の区別が明記されているわけではないが、積義の中で置換されている現代漢語の動詞や挙げられている用例から推断することができる。ところが、「作…看」の形の用例を通覧していると、「作畫圖看」のように、「…のように見える」と解釈したほうが自然な和訳になるものが相当数見受けられる。その例となるものを、蘇軾（1036-1101）の作品から挙げてみようと思う。

まず、《與孟震同遊常州僧舍三首》其二の「穉杉戢戢三千本，且作凌雲合抱看」<sup>26</sup>（宋 9363）は、3,000本の杉の木が雲を凌ぐように、また、両腕を合わせて抱えるほどの太さに見えるという意味である。

《唐道人言天目山上俯視雷雨每大雷電但聞雲中如嬰兒聲殊不聞雷震也》（宋 9178）における雷電についての「山頭只作嬰兒看」との表現は、小川環樹・山本和義『蘇東坡詩集』第2冊<sup>27</sup>では「（天目）山じゃただ赤ちゃんが泣くようなものだが」と訳されている。《歐陽晦夫遺接羅琴枕戲作詩謝之》の「倒載猶作山公看」（宋 9570）は、続国訳漢文大成の『蘇東坡詩集』<sup>28</sup>では「頭巾は、裏がへしに被つて、山簡の様に見えるであらう」と訳されている。

同様の例は数多く挙げるができる。例えば、劉敞（1019-1068）《和韓司諫移亳宮雙檜植于道山》の「風外共成蒼鶴舞，夜深齊作翠幢看」（宋 5883）〔風外共に蒼鶴の成く舞ひ、夜深けて齊しく翠幢の作く看ゆ〕の下旬は、2本の檜が夜が更けると翠色の幢のように見

<sup>24</sup> 「作…看」とほぼ同義の「似…看」（後述）が韋驥《凌晨馬上得惠詩再次元韻》其二の「來篇不似等閑看」（宋 8572）に見られ、これは「來篇等閑の似くには看ず」としか読めないことも参考される。

<sup>25</sup> 大野出《『元三大師御鬮諸鈔』考》、『筑波大・日本語と日本文学』32、2001年。日高衣紅《南宋版『天竺靈籤』原本再現の試み—後補図75番を例として—》、『芸術学論集』第1号、2020年。

<sup>26</sup> これも張相が挙げる数例の一つ。

<sup>27</sup> 小川環樹・山本和義『蘇東坡詩集』第2冊（筑摩書房、1984年）p.571。

<sup>28</sup> 続国訳漢文大成文学部第19巻『蘇東坡詩集』巻43（東洋文化協会、複版発行1959年）p.185。

古漢語～

えることを言ったもの。この例のように、見えるの意の「看」とセットになった「作」は「…のように」の意味になることが多い。この両句では、「作」と対になる「成」も同様に解することができる。周紫芝（1082-?）《四月五日早晴二首》其一の対句「鳥作郷關語，花如夢寐看」（宋 17386）において、「鳥が語る」と表現されていることの奇異さは「鳴く」の比喻と見なすことで解決するのに対し、「花看」の奇異さは「看」を自動詞と見なければ解決しないように思われる。〔鳥は郷關の作く語り、花は夢寐するが如く看ゆ〕という読みになるだろう。その他、鄭清之《茄子》の「青紫皮膚類宰官，光圓頭腦作僧看」（宋 34621）〔青紫の皮膚は宰官に類し、光圓なる頭腦は僧の作く看ゆ〕なども、「看」が自動詞であることの顕著な例である。また、文天祥（1236-1283）《紀事》の「自身身為齏粉碎，虜中方作丈夫看」（宋 42989）は、〔自身身齏粉するところと為りて碎けて、虜中<sup>はじめ</sup>方て丈夫と作して看られん〕とでも読むべきで、細かく見ると、「作…看」が「…として見られる」といった意味を表していることになる。

④訓読だけでは十分に表せない、含蓄のある表現 唐代の用例の考察で、「作…看」は、「作」の目的語の意味内容如何により、時として「訓読だけでは十分に表せない、含蓄のある表現」になることを述べたが、宋代に入ると、そのような用例が次第に増えてくる。

例えば曾鞏（1019-1083）《讀孟子》の「先生自是齊梁客，誰作商巖渭水看」（宋 5607）〔先生は自ら是れ齊梁の客、誰か商巖渭水と作して看ん〕の「商巖渭水」は少なくとも「商巖の傭夫・渭水の釣徒」というように、言葉を補わないと意味が把握しにくい。そして、商巖の傭夫は殷の傳説のことであり、渭水の釣徒は周の呂尚のことで、いずれも典故に基づき在野の賢士の比喻となり、作品のテーマたる孟子が野<sup>や</sup>に隠れて終わるような人物ではなかったということを言おうとしているのである。

このように「作」の目的語に典故性のある語を配置して、言外の意味を表したり、意味のふくらみを持たせたりすることが次第に普遍的なものになってくる。例を挙げよう。呂防《題梅壇》の「祇作南昌一尉看」（宋 11143）〔祇だ南昌の一尉と作して看たるのみ〕は、南昌の小官を務めた漢の梅福の故事（『漢書』本傳）を踏まえ、「世を避け下位に甘んじる人とはばかり見なしていた」の意を表す。中には陳師道《絶句》の「如何鄭公客，不作百年看」（宋 12643）〔如何ぞ鄭公の客、百年と作して看ざる〕のように、直訳程度ではほとんど把握できないようなものもある。呉戦壘校注『千首宋人絶句校注』の注によれば、客を好むことで知られた鄭公が罪を得て廃されると客が次々に離れていったのを、廷尉の翟公が慨嘆して「一死一生，乃知交情；一貧一富，乃知交态；一貴一賤，交情乃見」〔一死一生、乃ち交情を知り、一貧一富、乃ち交態を知り、一貴一賤、交情乃ち<sup>あらは</sup>見る〕と述べたという『漢書』鄭當時傳の記載を踏まえているという<sup>29</sup>。

また、数はあまり多くないが、俗語（諺、俚諺）を配置した詩句として、曹勛（1098?-1174）《山居雜詩九十首》中の一首の「好花正穠麗，不作十日看」（宋 21205）〔好花正に穠麗

<sup>29</sup> 呉戦壘校注『千首宋人絶句校注』下（浙江古籍出版社、1986年）p.624。

古漢語～

ならば、十日と作して看ず]を挙げることができる。ここの「十日」は「弄花一年，看花十日」[花を弄すること一年、花を見ること十日]<sup>30</sup>という俗語を一語に集約したものだと思う。したがって下句は「十日しか観賞できないようなものとは思わない（あるいは、思わないようにしよう）」といった意味になる。

㊦名詞ともとれる「看」 上述の通り、『漢語大詞典』の「看」の項には名詞としての釈義は立項されていないのだが、筆者が今回収集した用例の中には、名詞と見なせそうな「看」や名詞と見なすと都合のよくなる「看」が散見する。いくつか例を挙げよう。まず、黄庚（宋末元初）の七絶《題吳實齋北山別業》の頸聯「一區池占林泉勝，四面天開圖畫看」（宋 43576、及び元<sup>19</sup>58）を挙げたい。両句は対を成しており、訓読は「一區の池は林泉の勝を占め、四面の天は圖畫の看を開く」とするしかないように思われる。「圖畫看」は上述の通り、図画のような眺めということか。

以下、4例挙げよう。蒲道源（1260-1336）《題樂成亭卷》の「可樂當思處樂難，蒙成宜作未成看」（元<sup>19</sup>325）は、嚴密な対句が追求されているようだから、[楽しむ可くんば當に楽しみに處るの難きを思ふべく、成を蒙らば宜しく未だ成らざるの看を作すべし]と読むべきだろう。

鄭元祐（1292-1364）の七律《歲暮感事》の頷聯「破蕩未充狼虎欲，係累只作馬牛看」（元<sup>36</sup>329）は、緩い対句としてなら、[破蕩して未だ狼虎の欲を充たさず、係累せられて只だ馬牛の作く看るのみ]という読みでも差し支えないだろうが、対句としての緊密さを追求すると、[破蕩して未だ狼虎の欲を充たさず、係累せられて只だ馬牛の看を作すのみ]になる。

王世貞（1526-1590）の七律《過德州不及訪李于鱗見寄》の頷聯「我自可無衰鳳嘆，君今仍作卧龍看」（『國朝七子詩集註解』卷之二 14 丁、及び『明七子詩解』卷之二 11 丁<sup>31</sup>）は、[我自ら衰鳳の嘆無かる可けんや、君は今仍ほ卧龍の作く看ゆ]と読みたいところだが、対句としての緊密さを求めるなら、下句は「君は今仍ほ卧龍の看を作す」と読むべきだということになる。なお、下句については、題にある于鱗が李攀龍の字であり、羅宗強がこの2句について「婉轉地把自己比之于孔子，而把攀龍擬之于諸葛亮」と説いている<sup>32</sup>通り、君すなわち李攀龍が自分のことを卧龍すなわち諸葛孔明のように見なしているというのではなく、作者から見ての印象を述べていると見るのが自然なので、「諸葛孔明のように見える」という意味になる。

秦松齡（1637-1714）《過岱下阻雪不得登》の尾聯「誰知泰岱春晴望，轉作峩嵒天半看」（清 321）は、泰山の麓を通った作者が、せつかくの春の晴れた日だったにもかかわらず登山することができなかった残念さを詠んだものである。句全体は対句ではないが、「泰岱春晴望」が転じて「峩嵒天半看」となったということで、この二つの5字の語句は対偶が意識されて

<sup>30</sup> ここの「弄花」の意味については『漢語大詞典』第2巻 p.1312に「花工栽接整治花木」とあり、その用例として挙げられた陸游（1125-1210）『天彭牡丹譜』風俗紀の一文の中にこの俗語が見られる。ただ、この俗語の詳しい由来は未詳。なお、「種花一年，～」というバージョンもあるようである。

<sup>31</sup> 長澤規矩也編『和刻本漢詩集成』第7集（汲古書院、1977年）p.25、97。

<sup>32</sup> 『羅宗強文集』（中華書局、2019年）所収の『因緣居別集』に見える説。

古漢語～

いると見られる。とすれば、前者は「泰岱春晴の望」としか読みようがなく、そうすると後者は「峩峩天半の看」と読むのが自然だということになるのである。全体を訓読すると、〔誰か知らん泰岱春晴の望、轉じて峩峩天半の看と作らん〕である。

㊦「入看」用例の検討 以上の諸例の「看」を仮に名詞ととった場合、その意味は「～のような姿」・「～のような眺め」といったところだろうが、それ以外に、今回の用例収集・点検のプロセスで、「視野に入る」という意味に解釈できる「入看」の用例が散見することに気づいた。

この2字からすぐ頭に浮かぶ用例は王維（669-759、或いは701-761）《終南山》の「青靄入看無」（唐1277）で、これを〔青靄看に入りて無し〕と読む向きもある<sup>33</sup>が、〔～入りて看れば無し〕が正しいと思う。その他、釈智円《湖西雜感并序》其四の「不放常人暫入看」（宋1519）〔常人を放ちて暫くも入りて看しめず〕も同様である。

ところが、邵雍（1011-1077）《和君實端明洛陽看花》の「洛陽最得中和氣，一草一木皆入看」（宋4586）は、〔洛陽は最も中和の氣を得たり、一草一木皆看に入る〕と読むべきではないかと思われる。「入」と「看」の間に名詞が入る形も散見する。例えば、韓琦（1008-1075）《和潤侔王太博林畔松》（宋4001）の「孤風不入俗人看」〔孤風は俗人の看に入らず〕。松の孤高な風格は俗人の目には留まらないの意である。呂本中（1084-1145）《朱成伯秀野堂》の「有堂名秀野，未入俗眼看」（宋18180）〔堂有り秀野と名ふ、未だ俗眼の看に入らず〕。まだ世間の人目に留まっていないの意である。房皞（1199-1272以後）《紅梅》の「草木也隨時變，豔粧要入俗人看」（元②380）〔草木も隨時變ず、豔粧は俗人の看に入るを要す〕。段成己（1196-1254）《紅梅》其一（遼金2786）の「冷艷只宜閑處著，淺妝<sup>34</sup>難入俗人看」〔冷艷は只だ宜しく閑處に著るべく、淺妝は俗人の看に入り難し〕。

その他、1例見つけたただけだが、「不成看」の「看」も名詞のように見える。周昂（?-1211）《翠屏口七首》其三の「長松空夾道，蕭颯不成看」（遼金1466）〔長松空しく道を夾み、蕭颯として看を成さず〕に見られる。

「看」が2字語の構成要素として動詞の目的語の働きをしているものは、『漢語大詞典』を検索すると、2例—「受看」（看を受く）・「耐看」（看に耐ふ）（順に第2巻p.884、第8巻p.777）—見つけ出すことができる<sup>35</sup>。それぞれに『漢語大詞典』が挙げている用例のうち最古のものは、郭澄清の『大刀記』（1975年完成）、倪瓚（1301-1374）の作品であるが、以上により、「看」が名詞的に使われ目的語として、ごく少数の動詞に後接するという現象は、より早く北宋の初めにはすでにその萌芽が見られると言っていいかもしれない。

<sup>33</sup> 例えば都留春雄注『王維』（岩波書店中国詩人選集第6巻、1959年）p.117。もっとも、この本は、訳は「～青い山もやは、来てみると見えない」だから、訓読と訳の対応が不十分のように思われる。

<sup>34</sup> この作品は元②330にも見え、そこでは生卒年は1199-1279とされ、「妝」を「粧」に作る。

<sup>35</sup> 「中看」（第1巻p.596）も「看に中たる」と読み、ここに並べたいが、「中」の読音が第一声として扱われているので、保留した。『漢語大詞典』は第一声の「中」の積義の一つに㊦「犹言可，行，成」を設けていることから見て、「中看」を「可看」の意味でとらえているのかもしれない。なお、同詞典が「中看」の条に挙げている用例の一番目は梅堯臣（1002-1060）の詩句だが、これより早い孟郊（751-814）の《嚴河南》にも用例が見出される。

以上㊦㊧の検討により、「看」には「姿」・「眺め」「視野」等の意味の名詞として扱ってもおかしくないようなものが、宋代に入ってから出てきたと見なしてもいいのではないだろうか。この見方が成立するならば、日本人が従来「作…看」の形に対して当てはめてきた「…の看を作す」は、原文のシンタックスを完全に度外視した読み方だったとばかり、一概には言えないのではないかということになる。

## (2) 「爲…看」「成…看」「同…看」等の関連表現

㊦「爲…看」の形は、豊禅師《偈》の「試爲老僧看」(宋 217)〔試みに老僧の爲に看ん〕をはじめとして、「何々のために見る」もしくは「してみる」という意味のものが多い中で、ユージュアルな「作…看」と同じ意味で使われているものも見かけられる。王暉(1227-1304)《周文矩雷劍化龍圖》の「在晋當爲變怪看」(元⑤478)〔晋に在りては當に變怪と爲して看るべし〕、陶安(1312-1368)《方晴又雨》の「青天白日尋常事，此際當爲異様看」(明③203)〔青天白日は尋常の事、此の際は當に異様と爲して看るべし〕などが、その例である。刁繹《雪後遊琅玕山與韋驥聯句》の「堪爲畫圖看」(詠み手は韋驥)(宋 2019)〔畫圖と爲して看るに堪へたり〕は平仄に反する珍しい例だが、聯句のため無理をしたか。

㊧「成…看」の形は、例えば、楊萬里(1127-1206)《火閣午睡起負暄二首》其二の「盆池影裏看題壁，上字還成下字看」(宋 26625)〔盆池の影の裏題壁を看れば、上字還ほ下字と成りて看ゆ〕、趙蕃《賀魏使君雪用何叔信韻》の「早極真成上瑞看」(宋 30918)〔早極まるは真に上瑞と成して看る〕、蒲道源(1260-1336)《題褚鑑先明遠亭》の「表裏須同致，休成兩様看」(元⑨254)〔表裏須らく致を同じくすべし、兩様と成して看る休かれ〕などの例が挙げられる。

㊨唐代には見られなかった「同…看」の形が宋以後見られるようになる。陳宓(1171-1230)《鳧苾餉王丞》の「風味仍同荔子看」(宋 34069)〔風味は仍ほ荔子と同じく看る〕。クログワイの味をレイシと同じようだと云ったもの。揭傒斯(1274-1344)《墨竹》の「渭川自與瀟湘比，淇澳曾同君子看」(元⑩311)〔渭川は自ら瀟湘と比し、淇澳は曾て君子と同じく看たり〕や、張銘(乾隆己卯(1759) 挙人)《敗蕉》の「曾以新詩寫，還同舊雨看」(清 658)〔曾て新詩を以て寫し、還た舊雨と同じく看たり〕のそれぞれ下句は、「作…看」以外では珍しく、典故を用いている(前者は『詩經』衛風《淇澳》、後者は杜甫《秋述》)。朝鮮人の作も見られる。一徐正諄(光緒 17 年(1880)、清への貢使を務めた)《沙河驛遙同趙乾山侍郎寄贈韻》の「可憐此夜沙河月，清景應同萬里看」(清 1562)〔憐れむ可し此の夜沙河の月、清景應に萬里と同じく看るべし〕。今夜の月の清らかな影を、きっと私は万里のかなたの人々が眺めているのと同じようなものとして眺めているのだろうという意味に解される。「如同…看」の形を採った詩句もある。それは宋太宗(939-997)《賜陳搏》の「蒼生往世弊凋殘，今我如同赤子看」(宋 447)〔蒼生往世弊れて凋殘しぬ、今我赤子の如同く看る〕で、天子たる作者が人民を赤子のように見なすという意味である。

その他、ユージュアルな「作…看」と同様の意味を表す、その他の表現パターンと言えるも

古漢語～

のを列挙しておこう。㊦「如…看」の形。宋祁（998-1061）《九日至衛南》の「多謝黃花意，還如故國看」（宋 2366-2367）〔多謝す黃花の意、還た故國の如く看えしむるに〕。重陽節に訪れた衛南の地が、そこに咲いている菊のおかげで故郷のように見えたことに感謝しているのである。王越石《遊洞天四首》其三の「亂峰如展畫屏看」（宋 5019）〔亂峰畫屏を展ぐるが如く看ゆ〕。

㊧「似…看」の形。王洋（1087?-1154?）《前詩似不盡意別成二小詩》其一の「從今邂逅逢花處，要似朱萸子細看」（宋 19025）〔今より邂逅して花に逢はん處、朱萸の似く子細に看んと要ふ〕。汪士深《齋居遣興答施晋卿》の「白髮已從公道得，青山長似故人看」（元②4213）〔白髮は已に公道に従ひて得、青山は長く故人の似く看ゆ〕。なお、第1例の下旬は杜甫《九日藍田崔氏莊》（唐 2403）の句を踏まえている<sup>36</sup>。

㊨「當…看」の形。朱長文（1039-1098）《喜公權仲逢垂訪》の「萬動宜當靜處看」（宋 9801）〔萬動宜しく靜かなる處に當てて看るべし〕。訓読に惑わされそうになるが、もちろん「靜かなところと見なす」の意である。方回（1227-1307）《贈山翁》の「黑白石充碁子用，青黃樹當曆頭看」（宋 41445、及び元⑥29）〔黑白の石は碁子に充てて用ゐ、青黃の樹は曆頭に當てて看る〕は、「充」と「當」の互文になっている。連文鳳《讀文丞相宋瑞詩》の「何年得見忠臣傳，且把君詩當史看」（元⑬431）〔何れの年か忠臣傳を見るを得ん、且く君が詩をば史に當てて看ん〕や、韓性（1266-1341）《十二月五日》の「園林莫問春來未，且把梅花當雪看」（元⑰65）〔園林春來るや未だしやを問ふ莫かれ、且く梅花をば雪に當てて看よ〕は、現代漢語（「把○当做○看待」）への接近を感じさせる。なお、劉詵（1266-1341）《寄題胡氏澗月堂二首》其二の「嗟此泉與月，信當何人看」（元⑳229）〔ああ此の泉と月と、信に何人か看ると當さん〕のような見かけ上の一致に過ぎないものもある。

なお真山民（?-1274?）の《南劍水東臨清亭秋望》の「收拾一州歸眼底，只將詩當畫圖看」（『真山民詩集』15丁<sup>37</sup>）〔一州を收拾して眼底に歸し、只だ詩を將て畫圖に當てて看ん〕は、「一州の眺めを丸ごと眼底に焼き付け、それを詠んだ詩を絵の代わりにすることにしよう」ということだから、「看」は try to の意味で使われていると見るべきである。

㊩「以…看」の形。孔武仲（1041-1097）《廟下候風呈同行》の「王其故舊卹，勿以塗人看」（宋 10251）〔王其れ故舊もて卹れめ、塗人を以て看る勿かれ〕や、王十朋（1112-1171）《萬府君挽詞》の「東平隱君子，當以古人看」（宋 22654）〔東平の隱君子、當に古人を以て看るべし〕。

㊪「作…看」の関連表現としては、一定数見られる「作…觀」の形も挙げていいたろう。最も頻繁に見られるのは「作如是觀」で、これは『漢語大詞典』のこの語の条に「語出《金剛經》：“一切有爲法，如夢幻泡影，如露亦如電，應作如是觀。”后用于泛指对某一事物作如此的看法」とある（第1巻 p. 1248）通り、もともと仏教語であり、また、「觀」は「看法」の意味の名詞である。そのため、この語から応用されたと見られる「作…觀」の形も、仏教

<sup>36</sup> 第2例も上句が杜牧《送隱者一絕》（唐 5988）を踏まえている。

<sup>37</sup> 長澤規矩也編『和刻本漢詩集成』第16輯（汲古書院、1976年）p.424。

古漢語～

的なものの見方を述べたり、寺觀に参詣する等、仏教的な環境の中で詠んだりする場合に使われることが多いが、必ずしも仏教的な意味合いにのみ限定しなくてもよさそうで、且つ「觀」を動詞として読むことのできるものもある。例を挙げよう。趙汝諧（?-1223）《冰壺亭》の「請將秋月擬，亦作冰壺觀」（宋 32986）〔請ふ秋月を將て擬へ、亦冰壺と作して觀よ〕。兩句が対偶で、「擬」が動詞として使われているから、これと対応する「觀」も動詞で、實質的に「作…看」の形とほとんど同じということになる。陸游（1125-1209）《一笑》の「萬事任從皮外去，百年聊作夢中觀」（宋 24445）〔萬事皮外に去るに任從さん、百年聊か夢中に觀るを作す〕は、嚴密な対偶として見れば、この読みだが、「～夢中と作して觀る」とも読める。ただ、「作…看」においてはさほど見られなかったことだが、「作…觀」の「…」の部分には1字の語が入る頻度が比較的高い。例えば、丘処機（1147-1227）《題萊州招遠縣雲屯山觀》の「虚空舊基作新觀<sup>38</sup>」（遼金 1002）〔虚空舊基新觀を作す〕、趙蕃《徐君季純（あまりにも長い題なので下略）》其二の「雖然尚有扁舟念，一到君齋作是觀」（宋 30824）〔尚ほ扁舟の念有りと雖然も、一たび君が齋に到るや是の觀を作す〕、許有壬（1287-1364）《游秋口趙文卿窟室次可行韻》の「從教鄉里作奇觀」〔元④394〕〔鄉里奇觀と作すに從教せよ〕などである。七言の句における句末の「作」+2音語というのは、リズム上の安定性があるから、詩の作者はそのような意識で「作」の後に2音の目的語を配置していると想定してよさそうに思われる。

なお、鄭清之（1176-1251）《臂疼醫令灼艾戲成》の「幻體當如泡影觀」（宋 34619）は、「如…觀」の形を採る珍しい例で、これは〔幻體は當に泡影の如く觀るべし〕と読むしかないだろう。

①最初に述べた通り、明以後の詩句については、筆者の調査は十分でないのだが、「作…看」を言い換えた形であり現代漢語としても使われる「看作…」の用例を清代の資料中に発見したので、紹介しておきたい。周亮工（1612-1672）《群鴉寒話圖歌》の「到底不能看作薪」（清 170）〔到底薪と看作す能はず〕、胡天游（1696-1758）《同張明府泛五姓湖有懷眞谷山長》の「琉璃看作地上行，翡翠來從浦邊直」（清 541）〔琉璃地上と看作して行き、翡翠浦邊より來りて直し〕、諄賢親王奕譞（1840-1891）《航海牧歌》の「看作桑田未變時」（清 86）〔桑田未だ變ぜざる時と看作さん〕の3例である。最初の例など、6字目までは現代漢語と何ら変わりがない。

#### 4 「作…看」とその他の類似表現との比較

「作…看」（A）と同様の意味で使われる「爲…看」「成…看」「同…看」「似…看」「當…看」「以…看」等の形（B）を見てきたが、AとBでは、用例の数に大きな差がある。筆者が今回調査した資料の中で、Bのそれぞれの形の用例の数は、筆者が本稿で紹介した詩句のせい

<sup>38</sup> この句の後に「人呼舊址，為虚空也」との原注がある。

古漢語～

ぜい2～5倍程度に止まるのに対し、Aの用例の数は相当数に上り、大部な『全宋詩』と『全元詩』について言えば、前者は400余例、後者は150例弱だった（この両書は掲載作品の重複が一定数ある）。つまり、同じような意味であっても、Aの方が圧倒的に多く使われているのである。

では、その差の抛って来る所は何なのだろうか。この点については、正直なところ、筆者は明らかにすることができていないのだが、これらの形を含む詩句を解釈する際、ある種の相違が感じられるということは指摘しておいていただろうと思う。具体的に言うと、これまでも数回言及してきたことではあるが、Aは、「…」に典故を表す語が配置されていて、そのため言外の意味を汲みとって解釈したり、典故は使われていなくても、何らか言葉を補って解釈したりする必要のあるケースが少なくない。これに対し、Bは、一部用典的な表現の行われている詩句もありはするが、そのようなものは稀で、総じてストレートな解釈・和訳で済ませられるものが大半である。

宋末元初の于済が唐宋の詩に見られる「詩格」（詩句の表現の型）を分類整理して列举し、同時代の蔡正孫が増訂し注を附した『聯珠詩格』という書物が、元の大徳4年（1300）に刊行された<sup>39</sup>が、この本にはBの形の詩句は一つも採録されていない。ところが、Aの方は、用「只作」字格の詩句として挙げられた全4例すべてを「只作…看」の形のもの占め、用「莫作」字格の全4例もすべて「只作…看」の形のもの占めるという「活況」を呈している。その他、用「可惜」字格・用「一樣」字格・用「一樣」字又格・用「不須」字格のいずれにもAの形の詩句が1例ずつ挙げられている。これはAが、詩句の表現の型として、Bとは全く別格と言っていいような受け止め方をされるようになっていた一つの表れだと言えるだろう。そのころまでに「作…看」は詩句における言わば「定型表現」と言えるほどのものになっていたのである。

ただ、このような現象が起こった原因や背景は不明である。今後何らか解明のためのヒントをつかみたいと願っている。

### 附説：蘇軾・黄庭堅詩の和訳の検討

今回の「作…看」及び関連表現の点検作業では、一千になんなんとする詩句の読解を行ったが、その中にほんの少しではあるが、主として有名詩人の作品には国内外の先学がすでに解釈を施してくれているものがあり、参考にすることができ、非常にありがたかった。しかし一方、解釈の妥当性を疑う場合もあった。そこで、この場を借りて、いくつかの作品を取り上げて、私解を述べようと思うが、蘇軾については難解で自分自身が苦しんだ作品も取り上げることにする。

<sup>39</sup> なお、『聯珠詩格』は日本に渡来し、その後、中国では散逸してしまったと言われている（吉川幸次郎『元明詩概説』、岩波書店、1963年）が、当時の中国人の詩格についての認識を窺うための一つの資料とするのは問題ないと思う。

古漢語～

蘇軾《臂痛謁告作三絕句示四君子》其二の「祇愁戲瓦閑童子，却作泠泠一水看」（宋 9449）  
 [祇だ愁ふ瓦に戯るる閑童子、却つて泠泠たる一水と作して看んことを]。南山読書会《蘇軾詩注（十四）》<sup>40</sup>で「ただ気がかりなのは、かわらけを弄ぶ童子が音を立てて水しぶきがあがるのを見ようとして、この平静をかき乱そうとしはしないかということです」と訳されているが、筆者は、これも「作…看」のユージュアルな形として、「かわらけを弄ぶ童子が、ひっそりと静まり返った、かわらけ投げをするのもってこいの水だと見るのではなからうかと心配だ」と訳したほうが良いと考える。

同じく蘇軾《送喬全寄賀君六首并叙》其四の「舊聞父老晉郎官，已作飛騰變化看」（宋 9401）。これも、「～と見る、として見る」という解釈で通ると思うが、難解な作品なので、作品の意味内容を確認しておきたい。題に見える「賀君」とは、この作品の「叙」（宋 9401-9402）では「賀水部」と称されており、「唐末五代の人にして、道を得て死せず」、驚くべきことに、作者の時代にもなお生存していた。題に見えるもう一人の人物—喬全が「少しく大風疾を得て、幾ど死せんとし」たとき、賀君に道を学ばせてもらったおかげで、今年（元祐2年）で80歳になるものの、「益ます壯盛」である。この年の末に都にやってきた喬全は、明るる年の上元に蒙山で賀君と会う約束があり、賀君が作者と面識があると言っていたとの話を聞いて、七言19句の詩1首を作って喬全を送り、賀君に贈る七言絶句5首を作って喬全に言付けた旨が「叙」に記されている。問題の2句は賀君に贈る七絶の第3首の前半である。以上確認した作詩の背景を踏まえると、「前々からご老台は後晋（936-947）に郎官としてお仕えになった方でいらっしゃると伺っておりますので、天界へと昇り、もとのお姿を変えて、またこの世にお現れになった方とお見受けしております」というような解釈をするのがよいと思う。

黄庭堅（1045-1105）の七絶《題伯時畫觀魚僧》の結句「猶恐魚作故時看」（宋 11376）。題の意味は「魚を見ている僧を描いた伯時（李公林の字）揮毫の画に題す」ということ。まず詩の第3句までを見てみよう。—「横波一網腥城市，日暮江空煙水寒。當時萬事心已死」。筆者の解釈は次の通り。—「波に横たえられていた網が、捕れた魚ともども引き上げられて、町に生臭いにおいが立ち込めてきたが、日が暮れて川には人も物もすべて姿を消し、水面がけぶって寒々と見える。そのような、漁師をしていた当時のいろいろな思い出について心はもはや死んでしまったかのように何ら反応を起ささないが」といったところだろう。作者はこの僧を、凡俗では漁師をしていた人間と想像して詠んでいるものと思われる。以上3句を承けての結句なので、「網にかかった魚が昔のように自分を見る（にらみつける）のは今なお恐ろしい感じがする」といった意味にとるのが自然だと思われる。後半2句を倉田淳之介は「昔魚を捕ろうとして苦労した心は今も早や枯れてしまっている。それでもなお魚を見ると漁師をしていた時のことを思い出すのが恐ろしい」と訳し<sup>41</sup>、大野修作は「魚を取ろうとして苦労した心はいまや枯れているのに、描かれた魚を見ると、魚が往事のものを見方を

<sup>40</sup> 『アカデミア文学・語学編』第95号、2014年。

<sup>41</sup> 倉田淳之介『黄山谷』（集英社漢詩大系第18、1967年）p.172。

古漢語～

させるのが怖い」という意味に解釈している<sup>42</sup>が、David Jason Palumbo-Liu が“Though his mind is already dead to the myriad matters, Still he fears the fish will look upon him with the gaze of former times.”と訳している<sup>43</sup>のが正しいと思われる。

## おわりに

筆者は、現代漢語の「当做…一样看待」に相当する古漢語の「作…看」に対して我が国でなされてきた「…の看を作す」という訓読に対して覚えた違和感から出発して、この言わば異様な読み方にも何らかの原因や背景があるのではないかと想定し、アプローチを開始した。アプローチの方法として筆者が考えたのは、「作…看」の形が古漢語の中でどのように使われてきたかの調査、そしてそれを踏まえて、この形が中国漢詩の和刻本においてどう訓読されているかの再調査、さらに日本人作成の漢詩文においてこの形がどのように運用され、どのように訓読されているかの調査である。それらのうち、このほど第一段階の調査を一通り行ったので、その結果をまとめて記述したのが本稿である。

「作…看」についてのこれまでの言及としては、張相の「作某某看，即当做某某看待也，亦估量辭」との「疏釈」や、我が国江戸時代の鈴木玄淳の「作…看」と「爲…看」その他の形との異同、及び後者が非唐代的な表現であることの指摘などがある。

筆者は張相の疏釈を基本義として確認したうえで、玄淳の指摘した他の類似表現との比較も視野に入れて、作業を進めた。

「作…看」の形を最も早く使ったと見られるのは高適（704-765）だった。なお、張鼎も高適と同時代の人物であることが明確になれば、高適と並べてもよい。そして、次にこの形を使い、また、使用例も多いのは白居易（772-846）だった。彼の使用例を細かく吟味してみると、「…と見なす」「…として扱う」といった基本義での使用だけではなく、「…のように見なす」といった意味のものや、「…」の部分のを和訳するのに言葉を補う必要のある、換言すれば、言外の意味を併せ持つようなものも見られた。白居易の使用例に関することとしては、その他、付随的に「作…眼看」となる場合の「作…眼」の意味について、今回の作業で目睹した後代の用例と考え合わせて、その意味を明確に把握することができた。「作…看」の類似表現である「爲…看」の用例も白居易の作品には見られるが、それらは表面上の一致に過ぎないものだった。

白居易より後の唐代の作品には、「作…看」の形で言外の意味を併せ持つようなものが見られるとともに、この形をとりながらも、「(作者が) …となって何々に目を向けて見る」と

<sup>42</sup> 大野修作《黄庭堅詩における“もの”による思考——格物と題画詩——》（『鹿児島大学文科報告』第18号第一分冊、1982年）p.37。「往事」はママ。大野はこの解釈の前に示した詩の本文と書き下し文（p.36）で「故時」を「故事」と誤写している。また、大野の解釈では、伯時によって描かれた僧の気持ちと、それを想像して詠んでいる詩の作者黄庭堅の気持ちのごっちゃになっており、その点ですでにこの解釈は成り立たないだろう。

<sup>43</sup> David Jason Palumbo-Liu “Signing the Palimpsest : Huang Tingjian (1045-1105) and the Poetics of Appropriation”第2巻（University of California, Berkeley、1988年）p.425。

古漢語～

いう別の意味で使われているものがあつた。その他、「作…看」と同様の意味を表す「爲…看」の用例の存在も確認できた。

「作…看」の「…と見なす」「…として扱う」等の意味を「ユージュアル」なもの、それ以外の意味を「アンユージュアル」なものと呼称することにして、宋代から清代に至るまでの用例を点検してみた。

アンユージュアルなものとしては、禅語の「作麼」「作麼生」が使われている句、注意するの意の「作意」が使われている句、名詞「作者」が使われている句、「看」が「何々に目を向けて見る」という本来の意味で使われている句、「作」が「…をなす」や「…となる」という意味の純粋な動詞として使われている句、「作」が使役の動詞として使われている句があつた。

ユージュアルなものには「作…一様看」のように固定した形の常套句になっているものが見られるが、そのようにしばしば見かける表現の一つ「作畫圖看」は、「絵のように見える」と和訳するのが自然であり、『漢語大詞典』の釈義により裏付けることのできないことではあるが、「看」に「見える」という自動詞としての用法があるのではないかと疑われた。そして、少なくとも「作…看」の形をとる詩句からは、同種の使用例を数多く挙げる事ができた。

一方、「…」の部分の語が言外の意味を併せ持っていると感じられる用例が宋代に入ると次第に増えてくることが看取できた。そして、多くの用例を目睹する過程で、それらの語は典故性を持つものが大半であることが明らかになってきた。

これまた『漢語大詞典』の釈義で裏付けることのできないことなのだが、「作…看」の形をとる詩句の中には、「看」を名詞ととらえたほうが意味が通じやすいと感じられるものがあることが看取された。そのように感じられるわけは、主として、対偶をなす2句の間で「看」と対応する関係にある語の名詞性が濃厚な用例が存在する点にあつた。そうした名詞と見なしても差し支えのなさそうな「看」の用法は、今回の調査で何度か目睹した「入看」などの語の存在からも裏付けられるのではないかと感じられた。

宋代から清代に至るまでの作品に、「爲…看」「成…看」など、「作…看」との類似表現は、「作…觀」も含め、一定数見られた。また、清代の作品には「作…看」を言い換えた形の「看作…」が出現し、中には現代漢語と見まがいそうな詩句さえあつた。

「作…看」との類似表現は種々あるものの、それらの用例の総数は、今回の調査ではせいぜい数十例程度であつたのに対し、「作…看」の用例は一千になんなんとするほどだつた。この差の拠って来る所については、今のところ、明確な判断を下すことができてはいないが、両者を比較して容易に気づくのは、「…」の部分における典故性のある語の使用で、それが「作…看」では相当数を占めるのに対し、類似表現では稀にしか見かけなかつた。

その他、客観的な現象としては、詩句の表現の型を数多くリストアップして、その唐宋代における使用例を挙げた1300年刊行の『聯珠詩格』を見てみると、「只作…看」や「莫作…看」などの形が大方の認知を受け、一つの定型表現たる地位を獲得していたのではないかと

古漢語～

ということが窺われた。

筆者の今回のアプローチの到達目標は、日本語としても名詞として使うことのあまり多くない「看」に格助詞の「を」を付けた、「…の看を作す」という読み方が「作…看」の一般的な読み方として定着したことの原因や背景の究明だった。今回の考察により、古漢語の「看」にも、名詞として扱ってもおかしくないようなものが、あくまで詩句に限定されることとはいえ、宋代に入ってから見られるようになったと言っているかもしれない。この点がより確実なものとして検証されれば、日本での「…の看を作す」という読み方とをつなぐ一本の線となる。その他、様々な面の検討・検証が必要となるだろうが、本稿での考察を踏まえ、次は《日本漢詩における「作…看」の読みと用法について》(仮題)と題する論考を上梓したいと考えている。